

・ステップファミリーのストレス源とストレス

1 調査対象者のストレス特性

本調査の対象者のストレス特性について検討するため、ストレス源の特徴に関する問 13、ストレス反応としての心身の状態に関する問 28、家族関係満足度に関する問 29 への回答を分析した。

(1) ストレス源の特徴

問 13 は、9 項目からなる。それぞれの項目に記されたストレス源となりうる出来事などを、調査対象者が最近 1 カ月ほどの間にどれくらい経験したかについて「全くなかった」(1 点)、「ごくまれにあった」(2 点)、「時々あった」(3 点)、「何度もあった」(4 点)の 4 段階で評定するよう求めた。

この問 13 への回答について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果を表 -1 に示す。なお、因子数決定の基準は固有値 1 以上とした。

表から明らかなおり、第 1 因子はパートナーや子どもなどの家族成員との間で生じるストレスフルな出来事を表す項目に高く負荷している。よってこの因子を「家族内ストレス源」因子とする。一方、第 2 因子は親や親戚、近所の人たちなど、家族以外の人々との間で生じたストレスフルな出来事を表す項目に高く負荷している。よってこの因子を「家族外ストレス源」因子とする。なお、これら 2 つの因子間の相関は.38 であった。

表 -1 調査対象者のストレス源についての因子分析結果

項目	因子	
家族内ストレス源		
自分が「家族に理解されていない」と感じたこと	.816	-.124
家族内での自分の負担が大きすぎると感じたこと	.754	-.176
子ども(継子を含む)との関係で悩んだこと	.699	.099
パートナーとの関係で悩んだこと	.473	.280
家族外ストレス源		
自分の親や親戚との関係で悩んだこと	.077	.592
近所の人や子どもの学校関連の人との関係で悩んだこと	-.018	.507
自分もしくは現在のパートナーの元のパートナーとの関係で悩んだこと	-.007	.412
パートナーの親や親戚との関係で悩んだこと	.355	.368
職場の人間関係で悩んだこと	-.125	.347

(2) ストレス反応と家族関係満足度の特徴

問 28 は、16 項目からなる。それぞれの項目に記されたストレス反応を、調査対象者が最近 1 週間でどれくらい経験したかについて「全くなかった」(1 点)、「週に 1 ~ 2 日」(2 点)、「週に 3 ~ 4 日」(3 点)、「ほとんど毎日」(4 点)の 4 段階で評定するよう求めた。

この問 28 への回答について因子分析を行ったところ、固有値 1 以上の基準で 1 因子が見出された(表 -2)。よって、ストレス反応については「ストレス反応」因子のみからなる 1 因子構造とした。

表 -2 調査対象者のストレス反応についての因子分析結果

項 目	因子
ストレス反応	
家族や友達から励ましてもらっても気分が晴れないこと	.843
物事に集中できなかつたこと	.801
ゆううつだと感じたこと	.789
悲しいと感じたこと	.753
ふだんは何でもないことをわずらわしいと感じたこと	.747
何をするのも面倒と感じたこと	.722
ふだんより口数が少なくなったこと	.718
一人ぼっちでさびしいと感じたこと	.698
何かおそろしい気持ちがあったこと	.669
「毎日が楽しい」と感じたこと	-.627
食欲が落ちたこと	.591
生活について不満なく過ごせたこと	-.564
なかなか眠れなかつたこと	.513
仕事が手につかなかつたこと	.511
他の人と同じ程度の能力があると思ったこと	-.216
これから先のことについて積極的に考えたこと	-.145

また、家族関係への満足の程度について尋ねる問 29 は 3 項目からなる。それぞれの項目に記された家族成員間の関係について「不満である」(1 点)、「どちらかという不満」(2 点)、「どちらかという満足」(3 点)、「満足している」(4 点)の 4 段階で評定を求めた。この問 29 はわずか 3 項目ではあるけれども、構造の確認のため因子分析を行ったところ、1 因子構造が確認された(表 -3)。

表 -3 調査対象者の家族関係満足度についての因子分析結果

項目	因子
パートナーと子ども（継子を含む）との関わりについて	.886
自分と子ども（継子を含む）との関わりについて	.727
自分とパートナーとの関係について	.635

2 調査対象者のストレス源とストレス反応、家族関係満足度の関連

(1) ストレス源とストレス反応、家族関係満足度の特徴

上で見出された、家族内ストレス源、家族外ストレス源、ストレス反応ならびに家族関係満足度の4つの因子それぞれに高く負荷した項目群の平均値を算出し、それらをそれぞれの因子の意味するストレス特性得点とした。それぞれのストレス特性についての記述統計量を表-4に示す。

表 -4 調査対象者のストレス特性についての記述統計

	n	平均	標準偏差
家族内ストレス源	113	.78	2.32
家族外ストレス源	112	.58	1.80
ストレス反応	113	.90	1.95
家族関係満足度	113	.79	2.90

表から明らかなおりとおり、家族外ストレス源以外の3特性の係数は高く、十分な内的整合性を有している。家族外ストレス源の係数が低い理由として、家族外のストレス源となる対象が親や親戚、子どもの学校関係、職場の人間関係というように多岐にわたっており、また、調査対象者によっては子どものいない者や職業を持たない者がいることが考えられる。本来であれば、これらの対象者特性を考慮した分析が必要ではあるけれども、今回は調査対象数の少なさを考慮して、この家族外ストレス反応についてはここで得られた5項目の平均値をそのまま用いることとする。

既述のとおり、これらのストレス特性はいずれも4段階で評定を求めたものである。したがって、表-4からは、今回の調査対象者のストレス特性の全体的な特徴として次のようなものが読み取れる。まず家族内ストレス源については、必ずしも頻繁にそれを感じているわけではないものの、まれに、あるいは時々は感じているようである。一方、家族外ストレスについては、それを感じることは概して少ないといえる。またストレス反応については、さほど頻繁に感じてはいないものの、週に1~2日は何らかの心身の不調を感じていることがうかがわれる。また、家族関係に対する満足度は比較的高い。

(2) ストレス源とストレス反応、家族関係満足度の間の関連

次にこれら4つのストレス特性間の関連について、得点間の相関を表-5に示した。また、ストレス反応得点を基準変数、2種類のストレス源得点を説明変数とした重回帰分析の結果を表-6に、家族関係満足度を基準変数、2種類のストレス源得点を説明変数とする重回帰分析の結果を表-7に、それぞれ示した。

これら3つの表から次のことが分かる。まず、家族内ストレス源、家族外ストレス源ともにストレス反応と密接に関連している。とりわけ、家族内ストレスとストレス反応との関連が強い。横断的なデザインによって得られたデータの分析結果であるため、因果関係の同定には慎重であるべきだけれども、ここでの結果は、調査対象者が家族内外で感じているストレスが、彼ら/彼女らのストレス反応をかなりの程度規定していることを推察させる。

次いで家族関係満足度については、0次相関を見ると家族内ストレス源、家族外ストレス源ともに家族関係満足度と有意な相関を示している。しかし、重回帰分析の結果は家族内ストレス源のみが家族関係満足度と関連することを示している。家族内ストレス源と家族外ストレス源との相関が統制されたため、家族外ストレス源と家族関係満足度との間の見かけの相関が消えたことによると考えられる。

要するに、今回の調査対象者の心身のストレス反応に対しては、家族内ストレス源、家族外ストレス源の双方ともに密接な関連を示すけれども、家族関係満足度に対しては、家族内ストレスのみが関連しているといえる。

表 -5 ストレス特性間の相関

	1	2	3
1. 家族内ストレス源			
2. 家族外ストレス源	.36**		
3. ストレス反応	.66**	.46**	
4. 家族関係満足度	-.71**	-.26**	-.58**

** p<.01

表 -6 ストレス反応得点を基準変数とした重回帰分析の結果

	t	p<
家族内ストレス源	.56 7.41	.001
家族外ストレス源	.26 3.38	.001
R ²	.50	

表 -7 家族関係満足度を基準変数とした重回帰分析の結果

	t	p<
家族内ストレス源	-.70 9.48	.001
家族外ストレス源	-.03 .38	ns.
R ²	.50	